実践報告

専門職大学院における模擬授業の開発（その 1）
－国語科教育法研究及び教科総合ゼミを中心に－

花田　修一[1]

本稿は、平成 18 年度（本学の創設年度）前期から平成 25 年度前期までの 7 年半にわたる「国語科教育法研究」（1 年）及び「教科総合ゼミ（国語）」（2 年）の授業内容を中心に記述したものである。前者（1 年）の授業では、前期に主として国語科教育の歴史的考察や現代的課題の把握、後期に主として学生による中等学校（中学生・高校生）を対象とした模擬授業の実際とその省察を行ってきた。後者（2 年）の授業では、前期に主として国語科教育の現代的課題の焦点化と研究論文のテーマの決定、後期に主として学生各自の研究論文に即した模擬授業の実際とその省察を行ってきた。

本稿では、専門職大学院における、①模擬授業の目的や意義、②模擬授業の計画と方法、③具体的な模擬授業実践例、④模擬授業の評価と課題などについて報告する。

ところで今日、学校教育、特に国語科教育では、小学校から中等学校において言語能力の育成や言語活動の充実、論理的思考力や表現力、伝統的な言語文化に親しませ感性や情緒などを育むことなどの指導が強く求められている。そのためには、これらの能力や態度などを生徒に適切に指導できる質の高い専門的な知識や技能や力量が必要となる。まさに高度専門職業人としての力量である。

以下、その一環として、「国語科教育法研究」及び「教科総合ゼミ（国語）」の授業について、それらの授業資料や学生の学習指導案や授業の実際や相互評価などを基にして実践報告をしつつ、その教育的有効性を明らかにし、中等学校国語教師育成のための専門職大学院教育における模擬授業の実践的研究開発の一助としたい。

キーワード：模擬授業、授業目標、授業計画、授業展開、授業方法、授業評価、授業課題

Ⅰ　本授業の概要

1　本授業の目的

本授業は、本学を修了後、中学校及び高等学校の国語教師を目指す学生を対象として開講した必

1　日本教育大学院大学 学校教育研究科

修科目（通年）である。授業では、優れた専門職としての国語教師になるための知識や技能や素養などを身に付け、その実践的な活用能力を一層高めるために、「模擬授業」を通して、これからの中学生及び高校生に対して、確かで豊かな「国語力」を身に付けさせることができる指導力や授業力を高めることを目的としたものである。

なお、上記科目の受講者（国語科専攻）は、一期生から七期生までの 7 年間で、全 51 名である。

２　本授業の方法と計画

本授業の方法は、「国語科教育法研究」（1 年）では、前期に主として講義による国語科教育の歴史的考察や現代的課題の理解と考察を中心に進めた。後期は主として学生による模擬授業の実際と省察を中心に進めた。「教科総合ゼミ」（2 年）では、前期に主として国語科教育の現代的課題の焦点化と研究論文のテーマの設定を中心に進めた。後期は主として研究論文のテーマに即した学生による模擬授業とその省察を行った。それぞれ、通年全 30 時間計画である。学生は、1・2 年を通じて、一人 6 単位時間（一単位 50 分）の模擬授業に挑戦したことになる。

３　本授業の評価

本授業における評価は、出席率（30 パーセント・毎時間の評価と反省の記述内容）、模擬授業の内容と参加態度（40 パーセント）、定期試験（30 パーセント・授業後の筆記試験）などを総合的に判断して評価した。また、この成績評価の方法については、最初の授業で学生に明示した。

Ⅱ　本授業の実際

１　模擬授業の目的と意義の明示

模擬授業は、将来、中等学校の国語教師になることを前提に、国語授業力の質的向上を図るために実施することを学生に話した。学生は、すでに学部の 4 年生時代に教育実習は経験をしてきている。しかし、その経験だけでは不十分であることは、彼らの模擬授業を観察することによって明らかであった。例えば、発問一つにしても、その目的や意図が不明瞭であったり、板書機構にも一貫性がなかったり、学習教材研究が不十分であったりと、国語授業力の質的向上をめざした模擬授業への取り組みの必要性を痛感させられた。

これらのことを学生とも共有し、中等学校の生徒に真の国語力をつける授業をどのように展開していけばよいのか、その具体的な実践方法を習得するために、一人ひとりが模擬授業に挑戦することを確認し合った。

２　模擬授業の計画と方法の明示

まずは、本授業の全体のねらい・方法・計画・成績評価等について、シラバスを基に授業者から

説明した。前期の講義を中心とした授業を終えて、模擬授業の計画と方法等について、次の観点を明示した。

（1）授業デザインの構想力

授業は年間及び単元カリキュラムに示した教育目標を具現化するために行われるものであること。そのためには、学習効果が上がるような授業を設計する必要があること。したがって、カリキュラムに基づく学習指導案の立案、学習者の実態分析と把握、学習評価の準備などを具体的に計画することが大切であること等について話した。さらに、次のような四つの観点を考えて模擬授業に臨むように明示し、説明した。

①　学習指導案の形式と内容の観点

ア　単元観、教材観、学習者観、指導観等の明確で簡潔な記述

イ　単元の指導計画と使用教材と言語活動等の明確で簡潔な記述

ウ　単元の目標と評価規準の具体的な照応の記述

エ　本時の目標と評価規準の具体的な照応の記述

オ　本時の学習指導過程と言語活動の具体的な記述

カ　単元と本時の目標と評価の具体的な記述

②　学習者の実態分析と把握の観点

ア　学習教材に関する興味・関心・意欲等の情意的側面の把握

イ　学習教材に関する知識・技能等の認知的側面の把握

ウ　学習教材に関する知識・技能等の言語活動的側面の把握

エ　学習教材に関する思考・判断・表現・想像・認識等の言語機能的側面の把握

オ　学習教材に関する学び方や評価法等の言語学習的側面の把握

③　学習効果の評価の観点

ア　診断的・形成的・総括的評価等の設定

イ　観察・面接・ノート・ワークシート・レポート・ポートフォリオ等の設定

④　個別性に応じた学習指導の観点

ア　個別・ペア・グループ・一斉学習等の設定

イ　目標準拠の評価規準・個別性に応じた評価規準等の設定

（2）授業力向上の実践力

前述した授業デザインの構想に基づき、実際の授業に当たって、次の観点から説明をした。国語授業の質的向上を図るために欠かせない具体的な条件であることを明示した。

①　学習指導前に必要な実践力

ア　学習者の実態把握力（上記②の具体的な診断的評価）

イ　学習教材の徹底的な分析力（言語能力と言語内容の両面からの研究と分析）

ウ　授業デザインの構想力（カリキュラムに基づいた効果的な学習指導案を作成）

②　学習指導中に必要な実践力

ア　指導のねらい（目標・課題）を明示して学習者と指導者が共有できる力

イ　指導の内容（指導事項・言語活動）を精選して焦点化できる力

ウ　指導の方法（学習展開・形態）を明示して学習者と指導者が共有できる力

エ　指導の技術（発問・板書・ワークシート等）を明確にして学習効果を高める力

オ　学習者の支援（発言・ノート・話し合い等）を適切に指導・助言できる力

カ　指導と評価の一体化を図って授業が展開できる形成的な評価力

③　学習指導後に必要な実践力

ア　指導のねらいや内容等を振り返って省察ができる力

イ　指導の方法や技術等を振り返って省察ができる力

ウ　学習者に対する支援や助言等を振り返って省察ができる力

エ　学習者の実態把握の適否等を振り返って省察ができる力

オ　学習教材の分析の適否等を振り返って省察ができる力

カ　上記のアからオを総合的に省察し次の授業改善に生かすことができる力

以上のことを明示し、授業デザインは授業に向かうための事前の準備であり、設計であり、構想であることを説明した。また、学習教材研究も含め、用意周到な準備はどんなに研究しても終わりがないこと、これは、発問や板書やワークシート等の計画についても同じであること、学習者の診断的評価や学習形態や指導過程や言語活動等の設計についても同様であることを伝えた。これらの万全の準備と計画があってこそ授業に挑戦することが必要であること、授業力の質的向上は一朝一夕でできるものではないこと、常に指導者自身の謙虚で前向きな省察をふまえた向上心と積み重ねを忘れてはならないこと等について強調した。

３　学生による模擬授業の実際

次に示すのは、中学校第 1 学年を想定した学生Ａさん（以下、Ａと記述）による模擬授業の一部である。学習教材は、「ちょっと立ち止まって」（桑原茂夫）という説明文である。Ａは、学習指導案で、次のように教材観を書いた。以下、枠囲みは、Ａの文章を示す。

（１）教材観

> この教材は、冒頭の呼びかけ的表現による問題への接近や具体例、的確な話題の広げ方やまとめ方など、段落ごとに要点や要旨がはっきり読み取れるため、中学 1 年生が取り組む説明的文章の学習にふさわしい。新しいものの見方を示した文章をきっかけとして、自分自身の生活や経験などを新しい角度から見直し、視野を広げていくことができる教材である。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」等、様々な領域からもアプローチができる。

また、学習目標（身に付けさせたい言語能力）として、次の二つを挙げた。

（２）学習の目標

1　説明文の構成を理解し、説明文の書き方を身に付ける。
2　自分自身の生活や経験などを新しい角度から見直し、視野を広げる。

Aは、全 5 時間で次のような指導計画を設定した。

（３）学習の指導計画

第 1 次
第 1 時　①　教材に出てくる絵を通して、見方によって絵が違うことに気づかせる。
→　どこに着目すると何に見えるかを考えさせる。
②　形式段落に番号を振って全文を通読する。
→　辞書を使って新出漢字や語句の意味などを調べ内容を理解する。
第 2 時　①　説明文の型（序論・本論・結論）を理解する。
→　内容の理解を深めるために段落の構成を考えさせる。
②　本論を 3 つに分けて内容の理解を深める。
第 3 時　①　本論と結論の関係について捉える
②　結論に着目し筆者の考えを捉える。
第 2 次
第 4 時　①　ワークシートを使って説明文を書く。
②　グループで説明文を発表し書き方や説明の仕方について相互に学ぶ。

Aの模擬授業は、第 2 時を本時とした。次に示すのは、本時の学習指導展開である。

（４）本時の学習指導展開（50 分）

	学 習 内 容	学 習 活 動	留意点・評価
導入 5 分	①　前時の復習をする。 ②　本時の目標を確認する。	①　3 つの絵はそれぞれ何の絵に見えたかを確かめる。 ②　説明文であることと目標を板書で確認する。	①　本時の目標を板書する。 ②　把握しているかを確認する。 （関心・意欲・態度）
展開 40 分	①　説明文の型を考える。 ②　段落の構成を考える。 ③　本論の内容を押さえる。	①　序論（はじめ）本論（なか）結論（おわり）について理解する。 ②　形式段落に分け全体を三つの意味段落に振り分ける。 ③　内容ごとに、音読→発問→説明→板書を通して、本論の 3 つの励を押さえる。	①　既習の説明文を想起させる。 ②　具体例が三つあることに着目させる。また、接続詞や指示語に注目させる。 ④　教師が一方的に話さないように留意し、生徒から回答を引き出すように発問する。 （ノート視写観察）
まとめ 5 分	①　本時のまとめをする。 ②　次時の予告をする。	①　本時で学んだ内容を確認する。 ②　次時の内容を確認する。	①　本時の内容を発表させ確認する。 ②　次時につなげるように配慮する。

これらの授業デザインを基に模擬授業は展開された。以下に示すのは、実際の模擬授業に対する受講者 5 名からの相互評価と A 自身による省察と指導者（花田）からの評価である。

（５）授業に対する相互評価の観点

模擬授業に対する相互評価の観点を次のように指導者から明示した。この評価表は、受講者が授業後に記入して模擬授業者に手渡す。授業者は、それぞれの評価者に対してコメントを付して指導者に手渡す。指導者は、次時に評価者に返却する。それらを基に、相互評価の意見交流を約 20 分実施し、次の模擬授業に生かすという計画で展開していった。

授業者氏名：　　学習教材名：　　評価者氏名：				
第○講（年月日）国語科○年　**評 価 の 観 点**	A・B・C・Dを○で囲む			
1. 学習のねらい（目標）は十分に達成されているか	A	B	C	D
2. 学習教材の選択は対象学習者に適切であるか	A	B	C	D
3. 学習展開（指導過程）はねらいに即して工夫されているか	A	B	C	D
4. 学習者の言語活動は十分に保証され工夫されているか	A	B	C	D
5. 授業者の発問・板書・助言・態度などは適切であるか	A	B	C	D
＊　**授業者へのコメント**（よかった点と改善点を具体的に指摘して励まし合う） ○　よかった点 ○　改善すべき点				

授業者から評価者に対してのコメント欄		授業者印	
		花田の印	

（６）授業に対する授業評価の実際

この模擬授業に対する受講者は 6 名であった。以下、その評価を整理して示すことにする。

①　評価の観点の結果　（　）内は授業者の自己評価　「　」内は指導者（花田）の評価

１．学習のねらいの達成度　→　A 5 名　B 1 名　　(B)　「A」

２．学習教材の選択力　→　A 3 名　B 3 名　　(B)　「A」

３．学習展開の工夫　→　A 0 名　B 6 名　　(C)　「B」

４．言語活動の保証　→　A 2 名　B 3 名　C 1 名　(D)　「C」

５．授業者の発問・板書等　→　A 2 名　B 3 名　C 1 名　(C)　「B」

②　評価者がよかった点とコメントした内容　（　）は同じコメントの人数を示す

○　生徒が間違いやすい漢字を指摘したこと。

○　教える部分の要点をわかりやすく押さえていたこと。（3 名）
○　板書の文字が正しく整って読みやすかったこと。（5 名）
○　指示の仕方が明確であったこと。（2 名）
○　説明が丁寧であったこと。
○　声量が明瞭であったこと。
○　学習目標を明確に示したこと。

③　評価者が改善すべき点とコメントした内容　（　）は同じコメントの人数を示す

○　中学 1 年生に求めている内容が多くて難しすぎる。（2 名）
○　どの部分が重要なのかに注目させるべきだ。
○　授業からパッションが感じられない。伝わってこない。
○　困っている生徒には「指示語」「接続詞」に注目するようにという指示が必要だ。
○　生徒が理解しないまま授業が進行している印象があった。
○　「瞬」の漢字の説明はよいが正確に板書をしてほしい。
○　生徒の反応がよくないときには指名するなどの方法をとるべきだ。
○　教師の無言の時間が長すぎる。
○　今日のような授業ではワークシートを用意したほうが効果的である。（2 名）
○　「ぶっとばしもん」という発言は不用意である。
○　若干早口だった。
○　中学 1 年生では一時間の板書量は少し厳しい。
○　書く作業が多すぎる。もっと精選すべきである。

④　授業者から評価者へのコメントの内容

評価者一人ひとりに対して、授業者は次のようなコメントを書いて、次時に各自に返却した。一部引用する。評価者は、全員が次時に発表し、質疑応答と協議を行った。

○　授業参加をありがとうございました。パッションにつきましては、次回に見て学ばせていただきたいと思います。また、求めている内容が多いという点ですが、それは、私が生徒に求め過ぎているということでしょうか。具体的に教えていただければ幸いです。
○　生徒への指示のタイミングを考えていなかったことを反省しています。接続詞や指示語などの生徒への説明の対応についてアドバイスをお願いします。いろいろとためになるご指摘をありがとうございました。
○　教師が話しすぎるというご指摘をありがとうございます。無言の時間は、生徒からの自然と出る発言を期待していました。ワークシートについては、今回はノートを活用することにしました。最近は、ワークシートに頼りすぎていましたので。受けねらいの不用意な発言は慎みます。
○　「また詰め込みすぎたかな」と自分でも思っていました。時間内に終わらせなければと

あせって早口になってしまいました。以後、気をつけます。板書の分量も考える必要を感じます。いろいろな批判に感謝しています。本当にありがとう。

○　ご指摘のように確かに書く作業が多すぎました。やはりワークシートのほうがいいのかなとも考えます。生徒と対話しながら授業するということを念頭においていましたが、書くことと話すことのバランスも難しい課題です。ご指摘ありがとうございます。

⑤　授業者自身の自己評価

次に示すのはＡさんの自己評価表である。縮小して転載する。

授業者：[redacted]　教材：ちょっと立ち止まって（中１）評価者：[redacted]

第１３講（１３．７．９）国語科２年　評価の観点	評価（○で囲む）			
1　学習のねらい（目標）は十分に達成されているか	A	(B)	C	D
2　学習教材の選択は学習対象者に適切であるか	A	(B)	C	D
3　学習展開（指導過程）はねらいに即して工夫されているか	A	B	(C)	D
4　学習者の学習活動（言語活動）は十分に保証されているか	A	B	C	(D)
5　授業者の発問・板書・助言・態度などは適切であるか	A	B	(C)	D

＊　授業者へのコメント（よかった点と改善点を具体的に書いて励まし合う。）

○　よかった点・工夫した点

①　久ぶりに板書案をしっかり作成し、授業らしい授業を行った

②　毎回言語活動はいれる必要がないと考えているため、あえて、活動を入れなかった

③

○　改善すべき点

①　今回　教師らしいふるまいが全くできていなかったように感じる。なぜ現場の先生方

②　はあんなに上手に授業を行えるのか甚だ疑問である。①つめこみすぎ②早口

③　③不用意な発言④板書量の多さ⑤声のメリハリ⑥細かい配慮等々課題は山積。

授業者[redacted]のコメント欄：字もまがっていて整っていない上、文字サイズがバラバラ。自由自在に文字をあやつれるよう練習が必要だ。また、[redacted]さんに「パッションが！」っていわれたけれど、確かに情熱がなかった。自分のことで必死で、楽しく授業とかではなく「理解しなさいよ、コラ!!」っていう上からスタンスだった。反省。上からで指示命令型の授業では１番退屈する上、のこる印象は怖さしかない。今回は見事失敗って感じである。次に生かせ！

授業者サイン欄：[redacted]

花田サイン欄：（花）　7/16

歩幾分さまだまだ。一歩前進中。詳しくは7/16に。

⑥　指導者からの授業評価

Ａの模擬授業に対する評価者（受講者）の相互評価やＡ自身の自己評価などをふまえ、指導者は、次時に次のようなコメントをした。

○　よかった点

1　話し方が落ち着いていてよい。1 年生のときの授業より数段の進歩が見られる。

2　板書の計画も実際もよく考えられていてよい。

3　形式段落の図式化が生徒もわかりやすく理解できるのがよい。

○　改善すべき点

1　発問が一問一答式である。生徒の思考を促し、深めるような問いを考えること。
2　「視野」の類義語である「視点」「観点」「立場」などの語句も同時に教えること。
3　形式段落から意味段落に整理するときその理由や根拠を明らかにして教えること。

Ⅲ　本授業の成果と今後の課題

以上、「専門職大学院における模擬授業の開発（その 1）―国語科教育法研究及び教科総合ゼミを中心に―」の一部について実践報告をした。「要旨」でも述べたように、本稿では、「模擬授業の目的や意義」「模擬授業の計画と方法」「具体的な模擬授業実践例」「模擬授業の評価と課題」などの授業内容に焦点化して報告した。

本授業の成果を整理すると次のようなことが言える。

○　国語科授業に対する受講者のモチベーションが高まったこと。
○　国語科授業に関する基礎的知識や基本的な技能を模擬授業で修得したこと。
○　国語科授業に関する授業デザイン力の質的向上が高まったこと。

本授業で指導者が期待していた「学習教材研究の深化」「学習指導案の形式と内容の一体化」「学習目標と評価規準の設定法」「指導のねらいに適切な言語活動の選択」「学習指導過程の効果的な工夫」「板書・発問・ワークシートなどの指導技術の向上」「授業評価の効果的な方法の開発」なども、おおむね受講者の身に付いたと考えている。受講者一人ひとりが模擬授業の演習と相互評価を繰り返すことによって、授業力は確実に上達した。

今後の課題としては、受講者が様々な学習教材を選択して模擬授業に挑戦するように促していきたい。例えば、「話すこと・聞くこと」の領域における「スピーチ・ディベート・パネルディスカッション等」、「書くこと」の領域における「提案文・意見文・論説文等」、「読むこと」の領域における「随筆・詩歌・小説・評論等」、「伝統的な言語文化」における「文語詩・物語・随筆・漢詩・漢文等」である。受講者は、2 年間で 6 回ほどの模擬授業を経験することになる。したがって、各領域をひととおり取り扱うように指導していきたい。とりわけ、受講者が苦手としている領域やジャンルなどに挑戦させていきたい。

本稿では、説明文（中学 1 年生対象）の模擬授業を中心に報告した。次号では、古文（高校生対象）の模擬授業を中心に報告をする予定である。

（引用文献及び参考文献）

花田修一（2010－2014）「新国語科授業改革論－戦後国語教育史から学ぶもの－実践国語研究の確立をめざして－」『実践国語研究』（2010 年 4・5 月号から 2014 年 2・3 月号までの 4 年間 24 回にわたる連載論考）明治図書

花田修一（2013）「これからの『対話』学習のカリキュラムをどう開発するか」『国語授業におけ

る「対話」学習の開発』三省堂 PP.15－24
花田修一（2013）「専門職大学院における文章表現演習（その 2）」『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第 6 号』PP.27－40
花田修一（2012）「専門職大学院における文章表現演習（その 1）」『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第 5 号』PP.49－60
花田修一（2011）「専門職大学院におけるディベート的討議演習（その 4）－パネルディスカッションの教育的有効性とその実際－）」『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要 第 4 号』PP.65－79
花田修一 （2011）『伝統的な言語文化の学習指導事例集』（全 4 巻）明治図書
花田修一（2010）「専門職大学院におけるディベート的討議演習（その 3）－ディベートの教育的有効性とその実際－）」『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要第 3 号』PP.95－118
花田修一（2010－2011）「表現力の開発」『教育科学国語教育』（2011 年 4 月号から 2012 年 3 月号までの 12 回にわたる連載稿）明治図書
花田修一（2010）「『言語力の育成』なぜ強調されるのか―適切な言語運用力が人間力を育む」『現代教育科学』（3 月号）明治図書　PP.11－13
花田修一（2010）「『習得・活用・探求』学習―国語科学習の転換―実践的言語活用力を育てよう」『現代教育科学』（5 月号）明治図書　PP.59－62
花田修一（2009）「専門職大学院におけるディベート的討議演習（その 2）－ロールプレイングの教育的有効性とその実際－）」『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要第 2 号』PP.97－111
花田修一（2008）「専門職大学院におけるディベート的討議演習（その 1）－インナースピーチとペアトークの教育的有効性とその実際－）」『教育総合研究 日本教育大学院大学紀要第 1 号』PP.49－65
花田修一 （2008）『心を育てる敬語指導－心ある言葉の使い手をめざして』明治図書
花田修一 （2008）『心を育む国語科授業を創る－中学校編－』明治図書
花田修一 （2008）『心を育む言葉の教育－いま国語教育に足りないこと－』明治図書
花田修一 （1999）『「伝え合う力」とは何か－ある国語教室からの発信―』三省堂

花田修一　実践報告：専門職大学院における模擬授業の開発（その１）
－国語科教育法研究及び教科総合ゼミを中心に－　へのコメント

永井　礼正（日本教育大学院大学　学校教育研究科　准教授）

著者である花田修一氏は、長年国公立の中等教育現場で活躍され、多数の著作とともに国語科教育研究においても指導的立場にある実践的な研究者である。すでに、本学紀要「教育総合研究」においても、『専門職大学院における「ディベート的討議演習」』のシリーズと『専門職大学院における文章表現演習』のシリーズを著されており、教員養成系の専門職大学院における国語科教育に具体的指針を示されているとともに、その記録としてその実践が自身の手跡として将来に残るということは悦ばしい。合わせて後進の指導者や研究者のよきマニュアル、研究対象として広く読まれることを望みたい。

要旨に記載されている「今日、学校教育、特に国語科教育では、小学校から中等学校において言語能力の育成や言語活動の充実、論理的思考力や表現力、伝統的な言語文化に親しませ感性や情緒などを育むなどの指導が強く求められている。そのためには、これらの能力や態度などを生徒に適切に指導できる質の高い専門的な知識や技量や力量が必要となる。」という文章に注目してほしい。同様の文章は、先行する『専門職大学院における「ディベート的討議演習」（その３、その４）』『専門職大学院における文章表現演習』のシリーズにも記されているが、より具体的かつ深化した形の文章となっている。我が国における国語科教育の本質的目的を明文化しているように読めないだろうか？教育のグローバリゼーションが叫ばれる中、日本語、外国語や数学による論理的思考や表現力、また種々の言語能力が強調されるが、それと対等に「伝統的な言語文化に親しませ感性や情緒などを育むなどの指導」という国語という科目の持つ文化の継承の媒体としての日本語の教育の必要性が主張されている。

本稿は、そうした目的の一環として、先行する 2 シリーズに続き、専門的な知識、技能や素養を前提としたうえで、国語科授業をいかにより質の高いものとしてデザインするかということを「模擬授業」の実践を通じて体得する専門職大学院のカリキュラムの舞台裏であり、より包括的な立場からの授業の設計の指針ともいえる。このため、先行するシリーズは具体的実践性が高い記述であるのに比べ、本稿はより抽象性が高い記述になっている。具体的取り扱いについては、「ディベート的討議」を主題とした模擬授業の実践報告『専門職大学院における「ディベート的討議演習」』を参照にすると良い。また、これは先行するシリーズが「言語能力の育成や言語活動の充実、論理的思考力や表現力」をテーマとして教育指導する者にとってのテクニカルな養成を目指すとすれば、本シリーズが、国語科教育の包括的な実践の記録となり、模擬授業のあり方や、その教育的有効性を明らかにして、より深く研究発展することを期待して、コメントとしたい。